

本山桂川の過ごした昭和初期の市川市域

三村 宜敬（市川歴史博物館学芸員）

はじめに

本山桂川は、大正13年（1924）9月から昭和12年（1937）まで市川町に住んでいた。その経緯と本山が行なった活動については、拙著「本山桂川の足跡を探る」（市川歴史博物館館報 2017 pp.22-33）で述べた。本山は大正末期から昭和初期の市川町真間において神田の坂本書店から「閑話叢書」のシリーズを発行したり、「日本民俗研究会」を組織し、研究誌『民俗研究』を謄写版で発行したりと精力的に活動を行なった。そうしたなかで、本山は自身の居住する市川町、そして近郊についてどのような視点を持ってみていたのか本山の執筆した資料を取り上げて示したい。そのため、本稿においては、以下の2つの資料を使用する。

- ①現存する本山が書いた書簡資料—本山の朋友であった岩手県の佐々木喜善宛てに本山が送った書簡。
- ②本山主催の「日本民俗研究会」発行、『民俗研究』第24輯「葛飾雑記」に記録された昭和6年の市川町の記述。

これまであまり公にされてこなかった、2つの資料を提示し、本山が過ごした昭和初期の市川市域について紹介を行なう。

1. 本山桂川と佐々木喜善

本山と佐々木との関係については、先述の拙著においてふれているが、ここで改めて紹介する。

佐々木喜善（1886 - 1933）と本山は『土の鈴』という本山が長崎で編集・出版を行っていた雑誌を通じて交流を持つようになった。本山は佐々木に原稿を依頼し、それを掲載または謄写版による単行本出版など佐々木の研究の補助を行なっている。

佐々木と本山の交流の始まりは、大正10年（1921）からのようで、3月2日の日記に「長崎の本山桂川ト云フ人カラ自著ノ長崎ノ匂ヒト彩ト

云フ本ヲ編輯サレテイル「土ノ鈴」ト云フ雑誌三冊ニ手紙ヲ付ケテ送ラル〔遠野市立博物館 2004 p.59〕』という記述を見ることができる。そこから本山と佐々木は書簡の交換を行っている。この本山から佐々木に送られた現存する書簡は封書とハガキ合わせて85点が岩手県の遠野市立博物館に保管されており、本山が佐々木に送った『東奥異聞』（「閑話叢書」）の執筆依頼状までであるなど、貴重な内容の書面も含まれている。

なかでも本山が転居した市川町から送られたものには、大正末期から昭和初期にかけての市川に関する記述がある。

2. 本山書簡に見る動向と事象

本山書簡資料の記述については、筆者の資料整理番号：0000-000、種類（ハガキ・封書）、消印、表書き、差出人、書面の内容の順に5点を紹介する。本山の書簡には句点がないものがあるが本稿では、挿入している。

[資料1] 遠1620-013（写真1）

ハガキ（消印）13.8.24

岩手縣上閉伊郡土淵村

佐々木喜善様

常陸太田

本山桂川

[裏]

先日は御寄稿ありがたく存じます。何れも九月の土俗資料に登載させて頂きます。

「地球」ありがたく存じます。別封御返却致します。今度仕事の都合で家族共に千葉県市川町に移転することになりました。傳説の地下總に住めることを喜んで居ります。三十日引越します何れ改めて御報知致します。

八月二十四日

本資料は、消印から大正13年に出されたハガキであり、本山が市川町に転居する内容が書かれて

いる。この前年の本山は、8月末に長崎から上京したものの、直後に関東大震災に遭った。坪内逍遙の勧めもあり、西日本から沖縄方面調査へ行き、関東へ戻った直後である。そのため、本山の住所が「常陸太田」となっている。内容は、佐々木から原稿を受け取った礼を述べたあとに、仕事の都合により、家族とともに市川町へ引越す旨が書かれている。本山がいう「伝説の地下総」の伝説とは、手児奈や国府台合戦のことだったのだろうか。

この仕事とは、資料3の書簡でもわかるが、伊東教順が校長を勤めていた「市川実業学校」のことである。

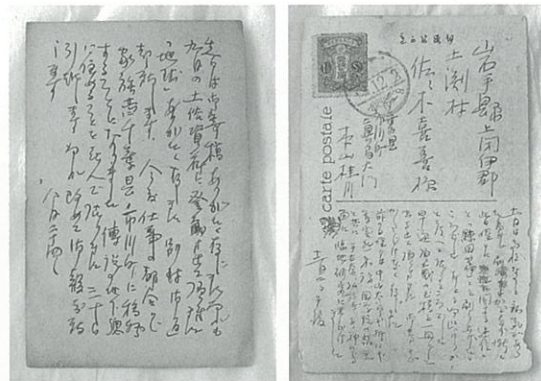


写真1：遠1620-013 裏 写真2：遠1620-029

【資料2】 遠1620-029 (写真2)

ハガキ (消印) ■12.2 宮古平良全景 (徳重商店発行) ※年判読不能大正13年以降と考えられる。

岩手縣上閉伊郡土淵村
佐々木喜善様

千葉県市川町眞間大門
本山桂川

【下】

十一月は多忙なのと病気であったために刷物もはかどらず漸く此日曜日に「性に関する迷信」と「黥図篇」とを刷り上げたところでした。あとを何にしようかと考へて居るところでした。早速頂戴の玉稿を一冊にして出させて頂きます。御芳志かたじけなく存じます。

前の日曜日は中山太郎氏折口氏等突然来訪、国学院の諸君と共に手古奈、弘法寺、子ノ神¹の方面

に臨地研究に出かけました。

十二月二日 午後

本資料は短いながら情報量が多い。まず、本山が謄写版で刷り上げたのは、大正13年5月から執筆した『琉球土俗叢書』であると思われる。このシリーズのなかには「黥図篇」として、本山が沖縄本島や宮古島で見た黥図が掲載されている。さらに佐々木から受け取った「玉稿」は、年代から考えて佐々木著「岩手郡昔話」のことであろう。

そして、中山太郎と折口信夫が連れ立って本山宅へ訪れたと述べている。本山がこの二人を手児奈霊神堂、真間山弘法寺を案内したということは距離的に鑑みても理解できるが、「子ノ神」とは現北方3丁目の子之神社のことであろう。真間の二つの名勝とは距離が離れているが、来客者たちには興味をそそられる場所であったのだろうか。

【資料3】 Tsa-028-04 (写真3)

封書 (消印) 14.3.5

【表】 岩手縣上閉伊郡土淵村
佐々木喜善様 御直

【裏】 千葉県市川町ま、大門
本山桂川

【七枚目】

(中略)

経営の學校の方も今度新築を竣工して二百名の生徒を收容する準備が出来ました。市川実業學校と新稱する市立の実業學校です。

これも「いもづる」でいち早く「釣などをやらせる全国に無比な學校」なんかと例の齋藤君に紹介されて居ります。(中略)

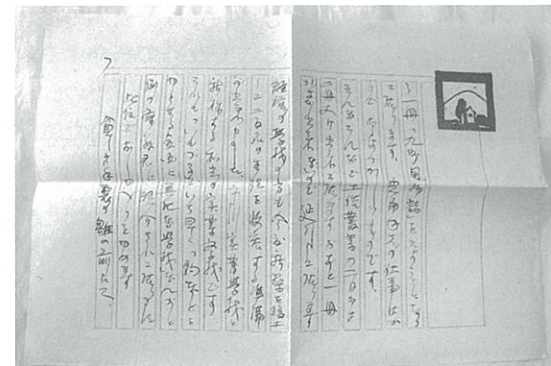


写真3：Tsa-028-11 七枚目

7枚目の便箋には本山が教頭を務めていた學校のことが述べられている。書面にある市川実業學校は、大正14年3月末まで「市川学館」といい、校長伊東教順が極楽寺(市川二丁目)の居宅の一部を開放し開いた学習塾「銀杏学舎」に由来する。本山の書簡の中で「今度新築を竣工して二百名の生徒を收容する準備が出来ました」とあるため、學校を現在の市川新田4丁目へ新築し、大正14年4月に「市川実業學校」と改めて移転する前のことである²。書簡の中で、「市立」とされているが、この學校は私立校であるため、この箇所は本山の誤記であろう。

さらに「齋藤君に紹介されて居ります」とあるのは、大正13年11月25日発行の『いも蔓』革新第一輯に掲載されている以下の文章である。

▽桂川はいよいよ市川へ移つて来て、先生に納まつてゐる。随意科³に釣りをやらせてゐるのなども、先づ他に例のない學校である〔齋藤 1924〕。

この文章を書いたのは、『いも蔓』を主催していた齋藤昌三⁴であり、市川実業學校で行なわれていた独特な授業方針について知ることができる。

【資料4】 Tsa-029-04 (写真4・5)

封書 (消印) 14.4.13 千葉・市川

【表】 岩手縣上閉伊郡土淵村
佐々木喜善様 御直披

【裏】 四月十三日 千葉県市川町眞間大門
本山桂川

【一枚目】

江戸川の桜が開き初めました

御送りのものたしかに入手いたしました。

御手数と御高配を感謝します。(中略)

それはさうと、私は不図としたことから北海道に高飛びしなければならぬ話が持上って

【二枚目】

居るのです。然かもそれが訓路なのですが、生活は苦しくてもやはり東京の方がよしく何とか難題を出しては一日伸ばしに伸して居ります⁵。然し話はどんどん進行中です。

それにも拘らず一方或事業を目論見み一旗擧げる

算段をもいたして居ります。

うまく行けば東京にとどまって成金になるかもしれません。実は意見の衝突から二三日前に突然學校と手を切ってしまったのです。色々の要件が毎日輻輳して来ます。それから私の運命がどう変わって行くか自分自身でも今日の午後のことさへ予期されない様に刻々と変化しつゝあります。

お薬のお代 送料一円十二銭小為替で
御送り致します。御查收下さいませ

市川眞間
本山桂川

佐々木喜善様

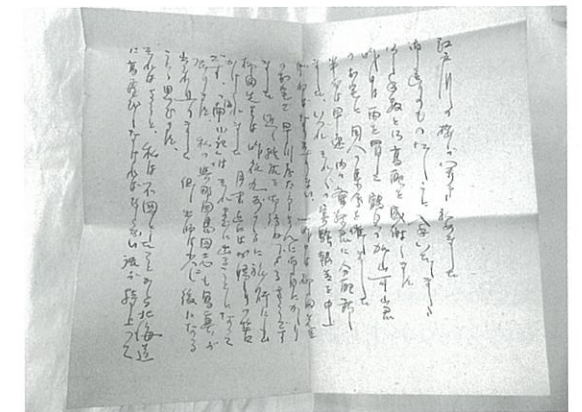


写真4：Tsa-029-04

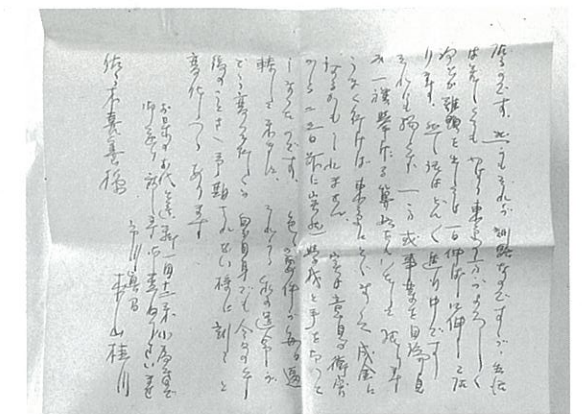


写真5：Tsa-029-05

本資料で本山が北海道へ行く話が持ち上がったとしているのは、市川実業學校に係る話である。この時の様子については、『本山桂川未刊文集』へ詳細が掲載されているため、引用して紹介する。

(教頭職を)引受けて見ると経営上校長と意見が合わず、そのころ商工省の知人から釧路の商業会議所書記長になる気はないかとの問い合わせがあり、月給百五十円位という。そこで、こっちの校長に他に転じないから、現在給の九十円を百円以上にしてもらいたいと申し込んだ。それがきっかけとなって、「どこへでも行ったらいいでしょう」という。挨拶面白からず、「この売僧奴」とばかり話は決裂。同十四年三月辞職。

引用内括弧は筆者挿入
このように本山は突然、市川実業学校と手を切る
こととなる。

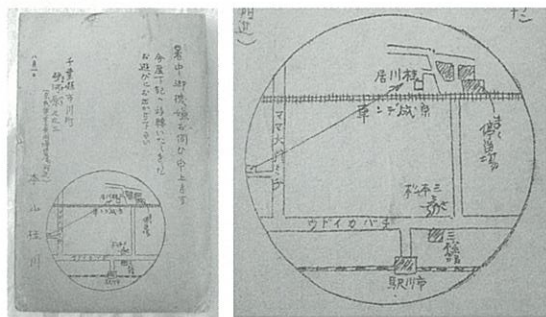
[資料5] 遠1638-001 (写真6・7)

ハガキ (消印) 14.8.2
岩手県上閉伊郡土淵村
佐々木 喜善様

[裏]

暑中御機嫌お伺ひ申上ます。
今度下記へ移轉いたしました。
お遊びにお出かけ下さい。

千葉県市川町
砂河原九九三
(京成電車真間停留場附近)。
八月一日 本山桂川



左写真6：遠1638-001
右写真7：遠1638-001の図拡大

このハガキは、本山から送られた転居通知で、裏面は謄写版によって文と家の位置が図示されている(写真6)。これまで、このハガキは本山が常陸太田から市川町へ転居した通知と考えられていたが、改めてハガキの地図を精査すると、「市

川町真間大門通り」から「市川町砂河原」へと転宅した際に発送されたものである。本山が描いた写真7には、市川駅、チバカイドウ(千葉街道)、ママ大門ミチ(真間大門道)、三本松、京成電車、まゝ停留場などが描かれている。そして、真間大門道の一角から矢印をのぼし、まゝ停留場(現京成真間駅)近くまで伸ばしている。この時本山は失業状態であるため、別の物件へと移ったのであろう。そしてこの場所で昭和12年まで過ごし、「日本民俗研究会」を組織するのである。

3. 本山が記録した昭和の市川地域

本山は、市川実業学校退職後に一時的に東京市復興局へ勤務した〔本山 2017 p.54〕。そして昭和3年(1928)に「日本民俗研究会」を組織し、『民俗研究』を毎月発行している。当初の内容は、「浅草の研究」などを行っていたが、昭和5、6年になると本山の調査対象は居住している市川町周辺へとになっていき、本山屈指の労作第22輯「下総・農具市」(『民俗研究』昭和5年)や第24輯「葛飾雑記」(『民俗研究』昭和6年2月10日発行)で、昭和初期の八幡町を取り上げている。さらに『民俗学』誌(昭和6年3月)において、本山豊治「八幡の藪の中一葛飾雑記より一」(p.33-37)としても発表をしている。

これらの執筆は、昭和初期の市川町、八幡町などの貴重な記録であるため、本稿では「葛飾雑記」の本山の文章を引用し、解説すると共に現在の様子も提示する。

●「葛飾雑記」から

まず「葛飾雑記」(『民俗研究』第24輯)の序文を引用掲載し紹介する。

葛飾雑記

本山桂川記
石井鶴秋画

石井鶴秋君を紹介す

石井鶴秋君は當年とつて十六才、此の春千葉縣市川町市川尋常高等小学校を卒業する。尋常五六年頃からペン画の天才的な発露を見せ、今やその一転向を示さうとしてゐる。今後私の採集の為に、随所に彼の画才を発揮してくれるであらう〔本山 1931 p.1〕。

本山がどうやって石井鶴秋氏と出会ったのかつ

いては明らかでないが、本山をして「ペン画の天才」と言わしている石井は、千葉街道沿いの民家の屋根や小川に掛けられた橋のスケッチを11カットも描いていることがわかる。

本山は昭和6年1月1日午後石井と共に八幡町へ調査に出発する。

同じ千葉街道に沿ひながら市川町では此の四五年来、表通りは年々旧態を改めて藁屋根が乏しくなったが、此處まで来ると、家並の三分ノ二はまだ藁屋根である〔本山 1931 p.4〕。

ここで、本山の記録では、この当時市川町の表通りでは藁屋根が乏しくなり、八幡町では昔の家並みが残っていることを述べている(図1)。さらに本山は石井少年と小川に架けられた橋を観察し、スケッチを行なったところで、調査を終えたようである。

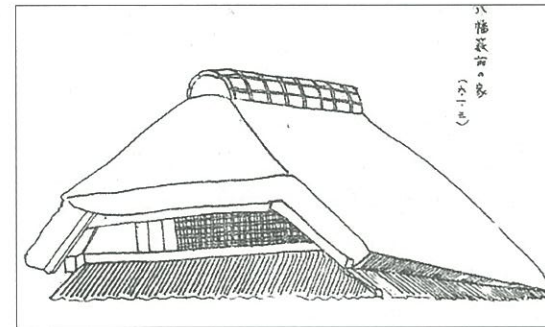


図1：八幡藪前の家(画：石井鶴秋)

●藁の龍と夜泣石

国府台の里見公園の入口では、角の茶屋の椎の木に、新しい藁細工の大蛇がまきつけてあった。つい昨日(一月十七日)お祓をして昨年のもとり替えたのだといふ。これに就ては曾て「旅と伝説」(同誌第二巻第二号)に富士講の麦藁蛇の傍証として書いたことがある。

蛇体は椎の古木の枝から枝に亘って長さ一間余、首の下に「部内安全」と認められた木の札と御幣が下つてゐる〔本山 1931 p.9〕。

本山がここで述べているのは、国府台の辻切りの大蛇についてである。現在大蛇を設置している場所は里見公園を中心とした配置となっているが、本山が見た辻切りは「入口近くの茶屋の椎の木」であるため、現在とは異なる場所に設置され

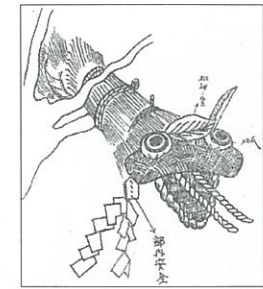


図2：本山の描いた辻切り



写真8：現在行われている国府台の辻切り

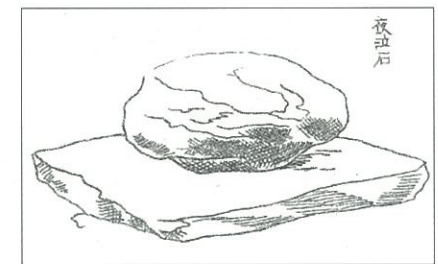


図3：夜泣石のスケッチ

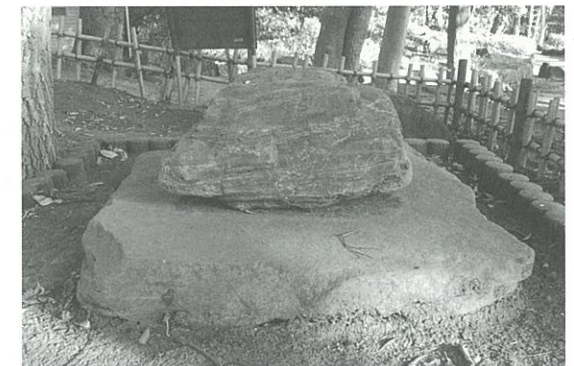


写真9：現在の夜泣石(2019.1.17撮影)



写真10：昭和初期の写真絵葉書



図4：里見廣次之廟スケッチ

ていたことがわかる。さらに、辻切りにつける札は現在は「町内安全」となっているため、この当時のものと異なっていることがわかる。続けて本山は夜泣石についても述べる。

里見公園には「夜泣石」がある。此の石が夜な夜な泣くので里見義弘が一刀あびせたら泣かなくなったといふ。石の上にある刀痕が如何にも新しい。それにしても此處には総寧寺といふ古刹があって、佐夜の中山夜泣石に因み深い通幻和尚の開山だと傳へられるから、其辺の因縁に附随したものらしい。たゞこの採集ではありのまゝのスケッチを主眼として下手な考証には深入りしない。

夜泣石の寸法は上図の如くである。この夜泣石の横に「里見廣次」の廟とした石碑が立ってゐて、石棺が二個、其又横の方に土に埋って上部ばかりが露出してゐる〔本山

1931 p.9〕。

本山が計測した夜泣石のサイズは横二尺（約60cm）×高さ一尺（約30cm）×巾一尺（約30cm）となっており、スケッチを掲載していることから当時の夜泣石の形状を知ることができる（図3）。ここで、本山の記述に3つ興味深い点がある。

①夜泣石の形状。現在見ることでできる夜泣き石は写真9である。これを本山のスケッチ（図3）と比較してみると上下が逆さまになっているように見受けられる。昭和初期頃に製作された写真絵葉書（写真10）の夜泣石は図3の本山のスケッチと酷似している。写真絵葉書の夜泣石を見ると下部に隙間があって若干不安定なように見える。そのため後に石を安定させるため、上下が入れ替えられたのであろうか。

②夜泣石に関する記述。本山は「石が夜な夜な泣くので里見義弘が一刀あびせたら泣かなくなった」と述べ、「刀痕が如何にも新しい」としており、現在市川市教育委員会が設置した解説板に記された、里見廣次の末娘の姫がこの石にもたれて泣き続け、息絶えたことで石が毎夜泣き出した。それを一人の武士がこの石を供養したことで泣き声がしなくなったという逸話と異なるものである。また本山は、『民俗研究』第15輯でも里見公園の夜泣石を取り上げている。

此寺は通幻寂霊和尚を開山とするのだがその第二十八世の住僧某後の山に鬼哭の声を聞き其処を覓めて地を穿ったら此石が出た。よって塚をつくり、供養すると啼声が止んだといふ。〔本山 1931「石の怪談」p.6〕。（ルビは筆者挿入）

本山は上記の文章を村尾正靖の『嘉陵紀行』を参照して執筆したことが伺える⁷。これらの伝説には類例が何パターンもある場合があるため、真偽を検証することは困難であろう。

③里見廣次之廟石碑。本山は図4の如くこのスケッチを残している。正面の「里見廣」の部分「文字欠損」と注釈しており、碑の右側には「文政十二年」と刻印されているようである。これは、先ほども引用した写真絵葉書（写真10）の「里見公園 里見氏ノ墓」とも特徴が一致しており、碑の正面が欠損し「■見廣■廟」となっていることがわかる。ほぼ同時期にスケッチと写真



写真11：里見氏の慰霊碑

で残されたこの石碑は、現在では存在が確認できていない。現在、里見公園には3基の「里見廣次並びに里見軍将士亡霊の碑」を見ることができる。その解説によると、うち2基は、文政12年（1829）に「里見諸士群亡塚（左）」「里見諸将霊墓（中央）」が建てられ、右側には石井辰五郎の名が刻印された「里見廣次之廟 里見先祖代々」という碑がある（写真11）。しかし、これらの石碑の形状、碑文は写真10・図4と一致していない。これらの碑は果たして文政年間から存在していたのか、本山が見た石碑はどこにあるのか、疑問が残る。

●江戸川筋の家舩

利根川即ち今の江戸川筋にあった家舩に就ては既に利根川図志其の図が掲載されているが、其の面影とも見るべき舩が市川国府台下に一艘、松戸葛飾橋上流に一艘、今も存在してゐる。国府台下のは長さ六間半あって、国勢調査にも立派に一世帯と認められてゐる。世帯主が宇田川由太郎といふ人で、それに六十ばかりのつれあいである。家号を「しんよしや」と称し、物品販売業である。上り下りの舩頭を相手に、ビール、ラムネ、菓子、煎餅類をひさぎ、且つお湯■つのである。

ここで述べられている家舩（船）とは、陸上に住居を持たず、船上に設置した居住域で生活を行なう水上生活民の船のことを述べている。さらにこの船では、江戸川を航行する船に対して、嗜好品などを販売していることを述べている。

本山は家舩に関して常々興味を持っていたようである。それは長崎在住時に柳田國男が沖縄調査

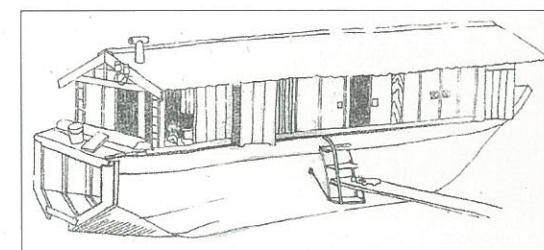


図5：本山の描いた家舩

の帰りに長崎に立ち寄り商業会議所などで「家舩」に関する講演会を行なったのを発端としているようである。特に柳田の原稿を欲していたこともあるが、編集していた雑誌『土の鈴』第14輯では当初「家舩特集」（未刊）を行なおうとしていたり、大正15年に神田の坂本書店から発行した「閑話叢書」に柳田國男『家舩の話』（未刊）をシリーズのラインナップの中に入れていたり、家舩について興味を持ち続ける。ただし、本山自身が家舩について事例収集を行い、論考をした様子は管見ながら見つかっていない。

おわりに

本山は佐々木とは非常に親密な書簡のやりとりを行なっている。現在ほど手軽な通信手段がなかった時代における書簡の内容は自身の仕事のことや家族のこと、佐々木のことを案じる内容まで様々である。

本稿で取り上げたように、岩手県佐々木に対して、自身の住んでいる市川町の様子を交え記述された本山の書簡資料は、本山と佐々木の間を知るためのものだけではなく、昭和初期の市川を知ることができる貴重なものである。また、本山が昭和5～6年の間に「下総・農具市」（『民俗研究』第22輯）、「葛飾雑記」（『民俗研究』第24輯）、「八幡の藪の中—葛飾雑記より—」（『民俗学』第3巻）など、自身が居住している市川町やその近郊で行なった調査などは、文章だけでなくスケッチも残している点からも、貴重な証言を残している。本稿では、本山の記録とその変化についてのみ言及したが、今後その要因や記録の裏づけと検証についても調査を進めることが課題である。

謝辞

本稿に掲載した佐々木喜善宛 本山桂川書簡を

翻刻するにあたり、岸本昌也氏、田村義也氏、志村真幸氏、広川英一郎氏のお力を借りました。ここに名前を挙げ感謝の意を示したいと思います。

引用・参考文献

- ・市川市教育委員会 1987『校歌は生きている』 p.78-79
- ・齋藤昌三 1924「趣味往来」『いも蔓』いもづる社 発行兼編集印刷 p.18
- ・遠野市立博物館 2004 図録『日本のグリム 佐々木喜善』遠野市市制施行50周年記念事業・遠野市立博物館第49回特別展示
- ・本山桂川 1931「葛飾雑記」『民俗研究』第24輯 民俗研究会 pp.1-20
- ・本山桂川 1931「八幡の藪の中一葛飾雑記より一」『民俗学』第3巻 pp.33-37
- ・本山桂川 2017『本山桂川未刊文集』本山プロダクション

¹ 手児奈霊神堂、真間山弘法寺とは距離的に非常に近いが、子ノ神が現在の神社の事を指すのであれば、京成中山駅まで行ったことになる。

² 市川市立宮田小学校は、市川実業学校の跡地に建っている。

³ 随意科目のことであり、必修教科・科目に対して、その履修が学生・生徒の随意的な科目。

⁴ 古書研究家で発禁本研究などを行なった。

⁵ 桂川は伊東と給与の件で揉めて退職する。この時市川学館の給与が九十円であった。

⁶ 石田圓空、折口信夫、松本信廣ら主催の雑誌。

⁷ 村尾正靖「嘉陵紀行」(『江戸近郊道しるべ』東洋文庫448 朝倉治彦編注)のp.228

この東竹垣の外、卵塔のうちに、青き石の大き二尺ばかりにて、人の蹲り居たる形したる石の蓮華座にすへたるが見ゆ、夜啼きの石といふ、當寺二十八世某の和尚の時、山に鬼哭の声をきく、其所を尋ね、地をうがちて此石を得たり、よりて塚を作りしかば、なく声やみしと云、跣石に、享保二丁酉十月廿三日とほり付しは、このいし供養の年月をしるせしなるべし

以上の箇所を本山は参照したのであろう。

平成 29 年度

市川市歴史博物館館報

発行日 平成31年 3月 31日

編集・発行 市川市歴史博物館

〒272-0837 市川市堀之内2-27-1

TEL 047 (373) 6351

FAX 047 (372) 5770